

ウィニフレッド・ワトソン作  
最所篤子訳

## ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第七章 午後三時四四分 五時二分

ミス・ラフォースが部屋に入ってきました。ひだの多い黒のドレープをたなびかせ、シルバーのカラーとサッシュがきらきらと光り、金髪はまるで淡い金色の冠のように輝いています。ひと目見たとたん、ミス・ペティグールのミス・デュバリーへの評価は、たちまちその影に隠れてしまいました。

（ああ！）とミス・ペティグールは自分のことのように鼻高々と考えました。（人のつくったものは自然には勝てっこありませんとも）

「デリシア！」ミス・デュバリーは飛び上がりました。「もう出てこないんじゃないかと思っただわ」

「さあ、落ち着いて、エディス」ミス・ラフォースがなだめます。「あなただったらいつも興奮しすぎよ」

「あたしの身になったらあなただってそうなるわよ」

「そうね。そういうものかもね」とミス・ラフォースが優しく言いました。「自分のことじゃないと、そう言うのは簡単よね。ところで、あなたとグウィネヴィア、話が合ったかしら？ 二人とも待たせてごめんなさいね」

「ええもちろん。ずいぶんおしゃべりしたのよ。あたしったら自慢しちゃったの。おかげで気持ちがすっとしたわ」

「いえいえ、そんなこと」とミス・ペティグールがあわてて口をはさみました。「ミス・デュバリーはあたくしが伺ったから、いろいろお話してくださっただけですよ」

ミス・ラフォースはくすくす笑いました。

「信じるわよ、二人とも」

「ああ、デリシア！」ミス・デュバリーの声が割れました。

さっきまでの不幸な顔に逆戻りです。今にも泣き出しそうになります。顔がくちやくちやになりましたが、お化粧を危険にさらすわけにはいきません。ソファに腰掛けると、必死にこらえようとします。

「だいじょうぶよ」とミス・ラフォースが同情をこめてなくさめるように言いました。「さあ話して。煙草は……これ？ 吸いなさいよ」自分とミス・デュバリーのために一本ずつ火をつけると、隣に座りました。「さ、どうしたの」

ミス・デュバリーは深々と煙草の煙を吸い込みました。

「トニーにふられたの」

「まさか！」ミス・ラフォースは信じられないという顔をしました。

ミス・ペティグルーは少しはなれて腰をおろしました。二人の邪魔をしているような気がしたのです。この二人は本当の友達同士。ミス・ペティグルーのことを忘れてしまっています。場をはずすべきだと感じましたが、何も言わないでただ部屋から出て行くのは嫌でした。ミス・デュバリーはあたくしがここにいるのを知ってらっしゃるんだから、聞こえてしまったからってそれはあたくしのせいじゃないもの。ミス・ペティグルーは出て行きたくなんかありませんでした。トニーがだれなのか、なぜトニーはミス・デュバリーを捨てたのか、知りたかったです。でも、だんだんよるべのない、みじめな気持ちになってきました。だって、このわくわくするような人たちも、いろんな面白い経験や冒険も、しよせん、みんなミス・ペティグルーの人生のほんの一瞬をかすめていくだけなのですから。

ミス・デュバリーがうなずきます。

「本当なの」むつつりと答えます。

「でも、前にも喧嘩はしたじゃない」

「したわよ。でもほんとの喧嘩じゃなかったわ。そついつのとは違つものよ」

「なるほど」とミス・ラフォースが納得します。「何があつたの？」

「つまりね、あなたトニーがどんなだか知ってるでしょ？ すごくいやきもち焼きで、エレベーターボーイにちょっと優しい口を利いただけで、あたしがその男に気があつて思つちやうの」

「知ってるわよ。でも、あなたって男の人に特別なれなれしくするじゃないの。それは認めなきゃ」

「そうよ。わかってるわよ。でもそれはただの習慣なのよ。あなただって知ってるでしょ。ちゃんと成功するまではそうしないわけにいかないじゃない。そのくせがとれないだけよ」

「そうね」とミス・ラフォースはまたうなずきました。

「あたしにはトニーだけなのよ。知ってるでしょ。これまでだって他にだれもいなかったわ。そりゃあ、一回目は仕事のために結婚するかもしれない。あたしもそうしたわ。でもちゃんと生活を築いたらもう仕事のために恋をしたりしないわよ。あたし、トニーと結婚したつていいのよ、申し込んでさえくれたらね。でも一度も申し込んでくれないの」

「結婚したくないのかもしれないわ。ほら、いろいろあきらめなくちゃいけないでしょ。」

今は仕事もお金もたくさんあつて自由なのに。結婚する必要なんてないわ。彼、結婚を申し込むなんてあつかましいと思つていいのかも。今の状態だと……要するに、愛情を示していくのよ。今はどっちかがそうしたいと思つたら別れればいいわ。でも、結婚となるとおおごとよ。彼、たぶんあなたに気をつかつているのよ」

「あたしも、そうじゃないかと思つて。たぶんぜったいだわ。あたしの稼ぎは彼よりも多いじゃない？ あの人、そう言つてくれさえすればいいのに。そうしたらあたし、どついたらいいか分かるもの。つまりね、本気だつてことを言つてさえくれれば、すぐに結婚するつて言わせて見せるわ」

「男つて変よね」とミス・ラフォース。

「まあね。トニーは矛盾してゐるのよ。あたしに奥さんみたいに操をたててほしいけれど、奥さんどころか、あたしには結婚のけの字でもないんだから」

「そこが男の変つてこなところなのよ。こつちに自分の気持ちを読めつていうんだから」「喜んでそつする気だわよ。ぜんぜんトニーなしでゐるよりは変つてこなトニーで結構だわ。でも、ちよつとくらい遊んだつていいじゃない、悪いことはしないんだから。だつて彼、六週間も外国に行かなきゃいけないかつたのよ。だから、フランク・デズモンドと出歩いてたの。なんにもないのよ、ほんと。ほんの遊び。ただ一回ね、夜に仲間で彼の週末の別荘に車で行つたのよ。他の人たちはあたしたちをおいて先に帰つたわ。あたしはもう一杯だけ飲むつもりだつたんだけど、フランクの車のところにいつたらライトが壊れてるじゃない。フランクはてんで機械音痴だし、ライトの代わりになる懐中電灯もなくつて、悪魔みたいに雨は降つてくるし、真つ暗闇だし、村までは一マイルもあるし、その晩、泊まるよりほか、しかたがないじゃない？」

「しかたないわね」とミス・ラフォースが同意しました。「あたしだつてそうしたと思つわ。でも、それがトニーにばれたのね」

涙があやうくあふれそうです。ミス・デュバリーの唇がわななきました。

「そうなの」

「それで」「ミス・ラフォースはおずおずと聞きました。「なんにもなかつたの？」」

「それがまたせつないところなの」「ミス・デュバリーは情けなさそうにつめきました。「フランクがものすごおつかつこいいつて知つてるでしょ。彼とちよつと何かあつたらいいなつて思わないわけでもないじゃない。でも、トニーがいるから、あたしあきらめたのよ。どつせそう思い込まれるならそのほうがまだわ」

「まあねえ。正しいことをするのはそれ自体が報いである、つて言つじゃない」

「楽しいほつがいわよ。どつせ同じ報いを受けるんなら」

「トニーはあなたのことを信じないでしょうね」

「ええ。どつしようもないわ。フランクの評判は知つてるでしょ。トニーつたら、あたしたちのどつちも信じないの……恥を忍んでフランクに頼み込んだのよ。もちろん、あたしのために嘘をついてくれるつて言つたわ」

「当然、そう言つてしょうね」とミス・ラフォースはやれやれというふうに言いました。「そこが大問題なのよ。だって、トニーはフランクが嘘つきだって知ってるでしょ。フランクが嘘をついてないって、どうすれば彼に分かるのよ？ ああどうしよう！ もう手に負えないわ」

「分かるわ。そういうものよね」

ミス・デュバリーの声がつまりました。なんとかこらえていた涙がこぼれ落ちました。ミス・ラフォースの腕をとりまです。

「ああ、デリシア！ なにか考えついて。彼なしじゃ生きていけないわ」

ミス・ラフォースが優しく慰めます。ミス・デュバリーは目をふくと、腹立たしげに顔を上げました。

「男のことで泣くなんて！ 信じられる？ あたしおかしいんじゃないかと思ってるでしょう。あたし変よ、こんなこと考えるなんて！ トニーなんて憎たらしい、疑りぶかいケダモノよ。もう二度とあんな男とかかわりなんて持つものですか」

「かつこいいわ」とミス・ラフォース。「でも、残念ながら本気じゃないわね」

ミス・デュバリーはまたがつくりとつなだれました。

「すぐあなたのことを思いついたの。あなたなら何か考えてくれるとおもって」

「やってみるけど」とミス・ラフォースは途方にくれたように言いました。「でも……トニーでしょ。おまけにその晩は泊まらなかったって彼にいつわけにもいかないじゃないわい」

「分かってる」

「難しいわ」

「まっすぐあなたのところに来たの。ニックが戻ったって聞いたから、あなたに会えるかどうか分からなかったけど、とにかく来たの」

「ええそうよ。ニックが戻ったわ」

「彼、明日って言ってたってあなた言わなかった？」

「そうなの」

「それじゃ、オギルヴィー家のパーティーには行くの？」

「ええ行くわ」

「彼はいつ帰ってきたの？」

「今朝よ」

「じゃあ、今はどい？」

「知らないわ。出てったから」

「何ですって？」

「一時間しかいなかったの」

「彼……彼……気がなくなつたわけじゃないわね？」とミス・デュバリーはがくぜんとして聞きました。

「違うわよ！ グウイネヴィアが追っ払っちゃったの。ほんとよ」  
「何ですって、追っ払った？」  
「彼女、彼が嫌いなもの」  
「冗談でしょ」  
「聞いてごらんなさい」  
「でもいつ帰ってくるか分からないでしょ？」  
「うっん、明日よ」  
「今晚、戻ってこないの？」  
「ええ」  
「どういうこと？」  
「グウイネヴィアがだめだって」  
「驚いたわねえ！」とミス・デュバリーは消え入りそうに言いました。  
「本当よ」  
「で、ニツクは納得したの？」  
「彼、他にどうしようもなかったもの」  
「冗談ばかり」  
「グウイネヴィアにはかなわなかったのよ」  
「信じられない！」  
ミス・デュバリーはくると向き直り、ミス・ペティグルーをじつと見つめました。尊敬、驚き、信じられないという表情が浮かんでいます。でも恐れ敬う気持ちが打ち勝ちました。  
「あなた、あのニツクを自分のフラットから追い出したの？」  
「あらそんな！」ミス・ペティグルーは唇をふるわせました。「そこまでひどくありませんわ」  
「あたし、大ピンチだったの」とミス・ラフォース。  
「あなたも？」とミス・デュバリーは声をしぼりだしました。  
「ニツクは明日、帰ってくるって言ったじゃない」  
「ええ」  
「だから昨日の夜、フィルがここに泊まったのよ」  
「まあたいへん！」  
「ニツクのことがあったときにはもう手遅れだったの」  
「そうでしょうね」  
「フィルはあたしの次のショーのスポンサーなのよ。だから嫌な思いをさせるわけにいかないわ。こういう世界にいる女の将来なんて分からないもの」  
「もちろん、そうよね」  
「フィルはニツクのことを知らないの」

「教えるのはうまいやり方じゃないわ、確かに」

「だからここにいたわけ」

「それで？」

「グウイネヴィアが追い出してくれたわ」

「うそ」

「ほんとよ」

「彼、感づいた？」

「ちつとも」

「で、その後、ニックが来たの？」

「そうなの」とミス・ラフォース。「それでフィルの煙草を見つけちゃったのよ」

「まあたいへん！」ミス・デュバリーが息を呑みます。

「それもグウイネヴィアがうまく片付けてくれたの。一本どつぞつて彼に勧めてね。彼、すつかり言いなりよ」

「すごいわ！」とミス・デュバリーはため息を吐きました。「それで彼、ひつかかったわけ？」

「彼女にかかったら」とミス・ラフォースは簡潔に言いました。「あなただっていちこつ残らず」

ミス・ラフォースは説明しました。ミス・ペティグルーは身を震わせたり、わなないたり、顔を赤らめたり、小さく抗議の声をあげました。でもその顔は輝いています。こんなに自分のことを誇らしく思ったのは生まれて初めてでした。そのときはなんとも思わなかったのですが、ミス・ラフォースが説明するのを聞いていると、要するに、たぶん、つまるところ、ミス・ペティグルーは奇跡を起こしたのかもしれない。ミス・ラフォースがこの大成功に大喜びでいる様子を見ると、嬉しくて第七天国まで行ってしまおうです。ニックは、思っていたよりもずっととずっと恐るべき人物だったようでした。それだけで十分、悪いことだったのです。

「たいした人だわ！」とミス・デュバリーは言いました。

近づくと、ミス・ペティグルーの手をとりました。

「グウイネヴィア。うまく化けたものね」それだけ言つと、ミス・ペティグルーの服に触れました。「あたし、すつかりだまされちゃったわ。あなた完璧よ」

「でしょう」とミス・ラフォース。

二人は顔を見合わせました。

「ニックと渡りあえるなら……」とミス・デュバリーは小声で言いました。

「あたしもそう思ったの」とミス・ラフォース。

二人は一緒に振り向くと、ミス・ペティグルーを見ました。

「これは賭けよ」とミス・デュバリー。

「あれこれ指示しちゃだめ」とミス・ペティグルーは慌てて言いました。「彼女にまかせたほうがいいの。正しいヒントをもらえば彼女、ちゃんと自分で何か考えつくわ。それが彼女のやり方なの。彼女を混乱させちゃだめ」

「もちろんよ」

「彼、来るの？」

「行かつて言つてたわ」

「今何時？」とミス・ラフォースが聞きました。

「四時一〇分よ」

「たいへん！ おまけにグウィネヴィアは着替えがまだよ。あなた、ちょうどいいから手伝つてあげて。午後と今晚と、両方どうにかなるようにね。午後はコートを脱がなくて大丈夫。着いたらすぐ帰るみたいに思わせるほうがいいから。オギルヴィー家つていっつもああだし」

「立つてみて」とミス・デュバリーはミス・ペティグルーにまじめな声で言いました。ミス・ペティグルーが立ち上がります。ミス・デュバリーは顔をしかめて眺めました。

「サイズはあなたと同じくらいね」

「あたしもそう思ったの」

「たぶんあなたの服が着られるわ」

「なんとかしましょう」

「まあ、どうしましょう！」ミス・ペティグルーはまごごした声をあげました。「いらつしやりたければどうぞ、おいでになつてくださいます。あたくしのことはお気遣いなく。お友達のところにおしかけるなんてできませんわ」

「オギルヴィー家におしかける」とミス・デュバリーはびっくりした声を出しました。

「テレンスのところにおしかける」とミス・ラフォース。

「モイラのところにおしかける」とミス・デュバリー。

「あの人たち、そんな言葉があることも知らないわよ」とミス・ラフォース。

「「迷惑にならないんです」とミス・ペティグルーの声がだんだん小さくなりました。ますます楽しいことが起りそつだと思つと胸がどきどきしてとても強く断ることができません。」「でも、どつかそんなにお手をわずらわせないで」

「わずらわす」とミス・デュバリーが大声を出しました。「あたしたちのほうがあなたに助けてもらつてつていうのに。あたしを救つてちょうだいね。どうかお願い。それを忘れないで」

「ああ、グウィネヴィア」とミス・ラフォースが懇願します。「あたしをがっかりさせないで。ただトニーをどうにかしてくれればいいのよ」

ミス・ペティグルーはもつ何も言いませんでした。どうして自分の幸福とは反対のことを一生懸命に願つことがあるでしょう。気持ちが高ぶつていきます。立ち上がっただ

けで、ニックのコカインを注射したみたいに、高揚した気分が身体を浸します。何が起ころうが知ったことではありません。受けて立とうじゃありませんか。さっきのように喜びで酔っ払ったようになりました。この驚くべき日に起こることに疑問をいだく段階はとくに過ぎてしまいました。トニーと一緒にいったい何をしなくてはいけないのか見当もつきませんでした。どうせ、この二人の言っていることはよく分からないのです。それでいいじゃありませんか。

「どちらへ参るんでございましょう」とミス・ペティグルーは聞きました。

「オギルヴィー家のカクテル・パーティーよ」

「カクテル・パーティー！」とミス・ペティグルーは幸せ一杯に言いました。「カクテル・パーティーだなんて！ このあたくしが？」

「どうして、何がいけないの？」とミス・デュバリーが問いただします。

「ほんとに、何がいけないんでございましょう」とミス・ペティグルーが繰り返します。

顔がぴかぴか輝いています。「さあ、女たちよ！」とミス・ペティグルーは言いました。

「どうか連れて行ってたもれ！」

そこで二人はミス・ペティグルーを寝室に連れて行きました。急いでお風呂に入っている間に、ミス・デュバリーとミス・ラフォースはミス・ラフォースのワードローブをじっくりと検討します。ミス・ペティグルーはミス・ラフォースが出しておいてくれたシルクの下着を身につけました。本物のシルクの下着をつけたのは生まれて初めてです。それをつけたとたん、ミス・ペティグルーの気分がすっかり変わりました。色っぽく、大胆で、怖いものなしな気分です。ミス・ペティグルーは手編みのウールのパンツと一緒に恥じらいも脱ぎ捨ててしまいました。

「シルクの下着のもつ心理的影響はまだ研究されつくしていないのだわ」とミス・ペティグルーはつきつきと考えました。

社交界にデビューするお嬢さんながら、ミス・ペティグルーは寝室に戻ってきました。短いレースのフリルの下に、脚のほとんどが見えています。少しも顔を赤らめません。

ミス・デュバリーは、ミス・ペティグルーを鏡の前に座らせました。

「いいえ」とミス・ペティグルー。「いけません。あたくし、最後の仕上げまで見たくありません。できあがる途中を見るほど興ざめなことはありませんわ。だから鏡は結構です」

そこで二人はミス・ペティグルーを鏡の前でないところに移動しました。さあ、いよいよ一日でいちばん重大な瞬間がやってきました。

「まず顔」とミス・デュバリー。

「どうにかできる？」とミス・ラフォースが不安げにたずねます。

「はじめがこれなら」とミス・デュバリー。「やりがいがあるわ」

少し離れてミス・デュバリーはミス・ペティグルーを眺めました。周りを歩き回りま

す。頭を一方にかしげ、眉を寄せます。プロの顔になったミス・デュバリーは別人でした。おろおろしたところも、心配も、ためらいも少しもありません。真剣で、確固として、有能です。仕事をはじめた専門家の顔です。

「顎のラインを見て」とミス・デュバリー。「きりつと締まっているわ。マッサージでとらなきゃならない脂肪がぜんぜんない。それにこの鼻。完璧よ。顔をどうにかする手はいろいろあるけど……鼻ばかりはね！ これだけは医者にたのまなきゃだめ。でもやるうっていう人はそんなにいないわ」

「きれいよね」とミス・ラフォースがうなずきます。

「三五歳を過ぎたら」とミス・デュバリーが講義をはじめます。「お化粧は控えめにしないとね。厚化粧ほど中年の女性にとっての大敵はないわ。年齢を際立たせちゃうのよ。ごまかすんじゃなくて。いろいろ使って強調してもいいのは、うんと若くて、皺のない顔だけ。狙うのは繊細でアーティスティックな効果よ。ほんとは素颜なのかも、と思わせる余地をなくしたら絶対にいけないの。眺める人に芸術なのか、それとも自然の美なのかって迷ってもらわなきゃ」

ミス・デュバリーは仕事に取りかかりました。ミス・ペティグールの顔をぐいぐいとこぶしで押し、ぴたぴたとパッティングし、とんとんと指でたたき、マッサージをします。クリームを塗り、クリームを落とす、ローションを叩き込み、ローションを落としました。肌がぴりぴりします。ほてって、さっぱりし、若返った気分です。

「よし！」とようやくミス・デュバリーが言いました。「ここではこれが精一杯よ。店とは違うわね。でも警沢はいえないわ」

そしてミス・ペティグールをも思わしげに見つめました。ミス・ペティグールはおずおずと見返します。ミス・デュバリーの店になんとかして行けたらよかったのですけれど。なんだか申し訳ない気がしてきました。でもこの上まだ化粧水やらクリームやらが必要だとは、ミス・ペティグールにはとても思えなかったのですが。

ミス・デュバリーはミス・ペティグールの顔を明かりのほうに向けました。

「ほらね。眉もまつげも黒くはしなかったの。ただちょっとトーンを暗くしただけよ。あなたこれを自然じゃないって思う？ まさかね。思わないでしょう」

「最高よ」ミス・ラフォースがうなずきます。「あなた天才だわ、エディス」

「まあね、この仕事ではあだし、けっこういい腕をしているから」とミス・デュバリーは控えめに答えました。

そして少しの間ミス・ペティグールをほればれと眺めます。

「さあ！」きびきびとした声を出しました。「次はドレス」

「ほんとにグリーンと金の縫い取りのビロードはだめ？」とミス・ラフォースが残念そうに尋ねます。

「ええ、だめよ」とミス・デュバリーはきっぱりといました。「グウィネヴィアにはあまりにも派手すぎるもの。雰囲気が違うの。正直に言っちゃつと、彼女には下品さが

足りないのよ。あなたは何を着ても似合うからいいけど、そっじゃなかったらほんと服のセンスはゼロね。グウィネヴィアはどんな服でもいいってわけじゃないの。似合う服じゃなくちゃ」

「仰せのとおり」とミス・ラフォーオスはしょんぼりしました。

「黒のベルベットね」とミス・デュバリー。

二人はそれをミス・ペティグルーに着せました。息詰まる一瞬、二人は怖くて目をあげることもできません。でもドレスは合いました。ぴったり、とはいきませんでした、誰も気がつかないでしょう。

「あたしと大体同じサイズだと思ったのよ」ミス・ラフォーオスが安堵のため息をもらしました。

ああよかった　とミス・ペティグルーは変なことを感謝しました。　食べるのに困っているおかげだわ！　中年太りをまぬがれたんですよ

「ネックレスがあるわ」とミス・デュバリー。「品があつて、レディっぽいやつ」

「真珠があるわ」とミス・ラフォーオス。「すごく上等ってわけじゃないけど、分かりやしないですよ」

「ぴったりよ」

「とんでもない」とミス・ペティグルーが断固として口をはさみました。「どなたの真珠もお借りできません。なくすのが心配でおちおちしていられませんもの。お気持ちはありがとうございますけれど、でも結構ですわ」

ミス・デュバリーとミス・ラフォーオスは顔を見合わせました。

「本気だわね」とミス・ラフォーオス。「グウィネヴィアがノーといったらノーなのよ」

「ヒスイのイヤリングがいいわ」とミス・デュバリー。「それとおそろいのネックレス。

ぎらぎらした石はグウィネヴィアの落ち着いた感じににあわないもの」

ミス・ペティグルーがぶるぶると身を震わせて何か言おうとしましたが、ミス・ラフォーオスがあわててさえぎります。

「ただのイミテーションなのよ。心配しなくてだいじょうぶ。売れっ子になる前の時代の名残なの。でもエディスはずっと気に入ってるのよね」

そこでそれをつけました。

「それから今晚だけ」とミス・デュバリー。「コサージュがいるわ。繊細で、グリーンとクリームを主体にした。色を添えるの。でも一輪だけ鮮やかな色をさしてもいいかもしれないわね。それから本物の花じゃなきゃだめよ。造花はだめ。生花こそ彼女らしさを表現するの……彼女の新鮮で飾らないところをね」

「すれてなくてね」とミス・ラフォーオス。

「おまけに頭がよくてね」とミス・デュバリーが首を振りました。

「信じられないくらいよね」とミス・ラフォーオスがうなずきます。

「威張るかと思っじゃないっ」

「ぜんぜんそんなことなくってね」

「たいしたものよ！」とミス・デュバリー。

「花はあたしが選ぶわ」とミス・ラフォースが約束します。

「そのほうがいいわね。不思議ね、どうして頭のいい人たちってほとんど身の回りにかまわないのかしら。そんなの超越しちゃっているのね。あら、これは嫌味じゃないのよ」

「お気になさらず」とミス・ペティグルー。

「さて」とミス・デュバリー。「今度は髪よ」

ミス・ペティグルーの髪を下ろします。

「まつすぐね。でもこてでウエーブを出すにはぴったりだわ。もともとくせがある髪だと、きれいにウエーブが出ないのよ……あら！」ミス・デュバリーはミス・ラフォースの顔をぼかんと見つめました。「あなた、こてがいらんないじゃない。その髪は天然なんだから。こて、持ってないでしょう。あたしたちお手上げよ」

「お手上げじゃないわ。持ってるもの」とミス・ラフォースは鼻高々に言いました。「モリー・ルロイが雨でカールが落ちちゃってここに来た晩のこと覚えてない？ 一晩中、ずるずるしちゃって、ひどいことになった晩よ……あれ以来、あたし、万ーのためにお客様用のこてを用意してあるの。それにこてを熱くする道具もちゃんとあるわ」

ミス・ラフォースは帽子の中からうさぎを取り出すマジシャンのように、道具をすっかり並べて見せました。ミス・デュバリーは仕事にとりかかります。

「シャンプーしている時間はないわ。残念だけどしょうがないわね。髪が脂っぽくなくてよかった。何束か、ゆるいウエーブがあればいいわ。こつた髪型をつくる時間がないからね」

器用な指先が飛ぶように動きます。ミス・ペティグルーは興奮で気を失いそうになりながら座っていました。これまで、生まれてからただの一度も、自然がくれたぱつとしない贈り物に手を加えたことなどなかったからです。「いったい」と母は言ったものです。「どうして神様のお作りになったものに手を加えようとするの？ 神様は喜びになるかしら？ なりませんとも。その顔も髪も神様がくださったんですよ。それがあなたにふさわしいと思われたから」でも、ミス・ペティグルーはわくわくする幸せな気分にとつぷりとつかって座っていました。いけないことをしている楽しみ、ちよつとせわしない、張り切った感じ、流行の服をまとうという背徳の喜び。それはうしろめたさの混じった素敵な恍惚感でした。ミス・ペティグルーはそれを楽しみました。思いつきり楽しんだのです。

「できた」とミス・デュバリー。「横わけにしたわ。額からゆるいウエーブの束を二つ三つ、さりげなく後ろに流したの。自然で、抜け感があるでしょう。うなじのところの上品なカールはさりげないけれど、世慣れた大人のイメージよ」

「見て」そう言つと、できあがった作品から離れて立ちました。

「まあ、すごいわ！」ミス・ラフォースがため息をつきます。「髪型で同じ人がこんな



Keiko Shimada

島田圭子画

に違って見えるなんて信じられる？」  
「もうよろしいんでしょうか？」ミス・ペティグルーが震え声で言いました。  
「できたわ」とミス・デュバリー。  
「完璧よ」とミス・ラフォースが高らかに言いました。  
「まあまあだね」とミス・デュバリーが控えめに同意します。  
「まだ自分の目が信じられないわ」とミス・ラフォースが感に堪えない声を出します。  
「いい素材だもの」とミス・デュバリー。身を乗り出すと控えめな態度を捨てました。  
「こんなこと言うのはなんだけど、なかなかうまくやったと思うわ」  
「見てもよろしいでしょうか？」とミス・ペティグルーが懇願します。  
「鏡がお待ちかねよ」とミス・デュバリー。  
ミス・ペティグルーは立ち上がりました。くるりと振り返り、目を見張りました。  
「うそですわ」ミス・ペティグルーがささやきました。  
「ほんとよ」とミス・デュバリーとミス・ラフォースが楽しそうに声をそろえます。  
「あたくしじゃありませんわ」とミス・ペティグルーが息をのみます。  
「もちろんあなたよ」とミス・デュバリー。  
「これがあるべきあなたよ」とミス・ラフォースが励まします。  
そして二人は口を閉じました。それは神聖な一瞬でした。それはミス・ペティグルー  
のための瞬間なのです。二人は黙って見守り、敬意を表しました。

ミス・ペティグルーはじつと目を見張りました。よろけないように椅子の背につかま  
ります。気が遠くなりそうでした。見たこともない女性がそこに立っています。貴婦人。  
気品があり、洗練され、あかぬけした、そしてあくまでもエレガントな女性。年齢を超  
越した女性。若くはありません。だからといって老けているわけでもありません。いつ  
たい誰が年齢など気にするでしょう？　こんな魅力的な女性にとって、年齢など問題で  
はありません。ドレスのぜいたくな黒いベルベットは深い光沢を秘めた艶があり、虹の  
ように輝いています。それは芸術品でした。その巧みな、美しいカットは身につける人  
を大胆でありながら同時に慎ましやかに見せ、見る人の心をとらえます。男性なら、い  
つたいこの女性がどちらなのか確かめずにはいられません。そのシンプルなラインが背  
をすらりと見せています。イヤリングがほんの少し、経験豊富な雰囲気をもじだして  
います。ほかに言いようがありません。ネックレスは彼女をエレガントに見せています。  
彼女、そう、ミス・ペティグルーはエレガントでした。

あの繊細な薔薇色の頬！　あれは自然の色なのかしら？　誰に見分けがつくでしょ  
う？　あのゆるくカールした髪！　だらりとたれ落ちる毛束はどこに行ってしまった  
のでしょうか。あれはあたくしの髪なのかしら？　はじめて見る気がします。それにこの  
目。こんなに青かったなんて！　上手に色を濃くしたこの眉とまつげといたら！　そ  
して唇。さりげなく挑発するような赤み！　これは口紅なのかな？　そう疑問に思った  
男性はキスしてみても、ようやく満足のいく答えを見つけられるのです。

彼女は微笑みました。鏡の中の女性も微笑み返します。自信たっぷりな落ち着いた態  
度です。びくびくした物腰、うかがうような笑い方、内気ではにかんだ態度、やぼった  
い姿、みつともない髪、黄色がかった肌の色、みんなどこにいつてしまったのかしら？  
それはみんな消えうせていました。サロン・デュ・バリーの熟練したオーナー兼経営者  
の魔法ですっかり消えてしまったのです。

ミス・ペティグルーはうつとりとし、ぼうぜんとして我を忘れて、夢が描き出した自分を  
見つめていました。喉にかたまりがこみ上げてきます。目がうるんできました。

「グウイネヴィア」大慌てのミス・デュバリーが金切り声をあげました。「お願いだか  
ら、こらえてちょうだい」

「グウイネヴィア」ミス・ラフォースが息を止めます。「我慢して。ね、お願い。お化  
粧が。各員はお化粧への義務を全うせよ、よ」

ミス・ペティグルーは英雄的な努力を払いました。

「はい、ネルソン提督」とミス・ペティグルーは威厳をもって言いました。「『イングラ  
ンドの期待にこたえよ』、ですわね。分かっております、ちゃんと気をつけますわ」

「さ、靴よ」とミス・デュバリーが言いました。

ミス・ペティグルーが履いてみます。

「まあ！」ミス・ペティグルーはびっくりしました。「ほんの少し大きいだけですわ」  
「それなら一安心」とミス・ラフォースはほっとして言いました。「小さすぎるよりも

いもの。途中で中敷を買いましょう」

「コートがいるわ」とミス・デュバリー。

ミス・ペティグルーはこの輝かしい自分がおんぼろの茶色のツイードの下にかき消されるところを想像してぞっとしました。でも心配ご無用！ あっという間に毛皮の中に包みこまれました。あくまでも柔らかく、あくまでも滑らかで、夢のように温かい毛皮。こんな贅沢なものがあるなんて。

「ああ！」とミス・ペティグルーはため息をつきました。「ああ！ 信じられませんか。これまでずっと、一生に一度でいいから毛皮のコートを着てみたいと心から願っておいりましたのよ」

「帽子はなし？」とミス・デュバリー。

「あたしのはどれもあわないわ」とミス・ラフォースが言いました。「帽子なしでよしとしましょう。だれも気がつかないわ」

手袋、ハンカチ、それに新しいハンドバッグ。

「準備はいい？」ミス・デュバリーは最後に自分のお直しをしてから聞きました。

「万端よ」とミス・ラフォース。「さ、出かけましょう」

最後に上から下まで見直します。よし、これで完璧。そして、三人はドアに向かいま